

にいがた じこ老施協

(社)新潟県老人福祉施設協議会広報誌

2010.12.25
No. 10



「第16回新潟県老人福祉施設 研究大会を終えて」

特別養護老人ホームかんばらの里
園長 佐藤 裕

このたびの研究大会は、当初参加人数に不安がありましたが、結果的に第一日目は一般の方も含め、約900名の参加をいただくことができました。その大人数のなかで、大きなトラブルも事故もなく円滑な運営ができたことは、実行委員会の皆様、事務局の皆様及び関係者の皆様によるご協力の賜物と、まずはお礼申し上げます。

初日の全体会では、136名の方が会長表彰を受賞され、それぞれ管理職として、あるいは中堅職員として頑張っておられることに力強いものを感じ、盛大な拍手を送らせていただきました。また、近藤会長の開会挨拶のなかで、「福祉も変えていかねばならないもの、変えてはいけないものがある」という言葉がありましたが、当日の講師であった二宮清純氏が、かつてテレビ番組中で、国技の相撲について「変えねばならないもの、変えてはいけないものがある」と発言してT氏と論争になったことを思い出し、講演に先立っての伏線だったのかな…と感じたのは穿ちすぎでしょうか。とにかく、鎌田氏と二宮氏の講演は、得るものが多くかったとの感想をたくさんいただきました。

研究大会たるところの第二日目分科会は、残念ながら役割上じっくりと聞くことができなかったのですが、ぐるりと巡って、どの会場でも真剣かつ熱氣あふれる講義、事例発表とともに、“生きがい、働きがいのある福祉社会を目指して”活発な討議、意見交換が行われていた様子を感じることができました。

最期に、実行委員長としての役割は上手く果たせなかった気がしますが、多くの人の手によって作り上げた大会であったと思いますし、幾つかの課題を残したとしても、とりあえず成功裏に終わることができたことに改めて皆様に感謝申し上げます。

Contents

第16回新潟県老人福祉施設研究大会を終えて 1
新潟県老人福祉施設研究大会に参加して・平成22年度第16回研究大会 2

高福祉実現には高負担の覚悟を・新潟県遊技業協同組合「福祉車両」の贈呈施設について 3
施設長リレーコラム・編集後記 4

新潟県老人福祉施設研究大会に参加して



軽費老人ホーム
有明ハイツ
福祉係長兼任主任生活相談員
上原田紀子

第16回 新潟県老人福祉施設研究大会「生きがい、働きがいのある福祉社会を目指して～変わり行く時代のニーズを考える～」をテーマに、初日の全体会の総合司会として務めさせていただきました。大会当日、会場では多くのスタッフがこの日のために準備を進められ、最終打合せが緊迫したなかで行われました。会場を確認させていただくと司会席がなぜかぼつんと隔離された場所のように思え、

このような大会場で（満席になってほしい願い、いやこの半分くらいの会場でもとの思いが…）司会を務めさせて頂くことに責任の重さを痛感させられました。

大会が始まると不安な気持ちより前に前に進めていくことに、ただただ集中と緊張の連続そんな中、スタッフの皆様、そして参加者の温かい拍手に助けて頂きながら何とか最後の挨拶までたどりつくことが出来ましたこと、ここに感謝申し上げます。

今後多くの出会いと、このような貴重な機会を体験させていただいたことに感謝しながら、生きがい、働きがいある福祉社会を目指し日々努力していきたいと思います。これからもご指導のほどよろしくお願いいたします。

平成22年度第16回研究大会 ～生きがい・働きがいのある福祉社会を目指して～

今年の研究大会は、9月28日・29日の二日間の日程で、第2ブロックの新潟市（ANAクラウンプラザホテル新潟）で開催されました。

当日は朝から雨模様で、式典や講演会への出足が心配されましたが、会員、一般参加者合わせて900人の方々から参加いただき、初日の式典・講演会、そして二日目の分科会と、無事に日程を終了致しました。

また大会運営に当たっては、第2ブロックを中心に県内各地から20人の会員の皆様がお手伝いに集まつて下さいました。ご協力ありがとうございました。



1. 受付

雨模様で出足が心配されましたが、受付開始とともに大勢の会員の皆様がご来場下さいました。



2. 式典

今年は136名の皆様が会長表彰を受賞しました。受賞者を代表して、特養「かんばらの里」田村聰美さんが表彰状を授与されました。



3. 講演会

講演開始前の鎌田寅先生です。



4. 交流会

講演会終了後は、講師の二宮清純先生にもご出席いただき、交流会を行いました。



5. 分科会

二日目の分科会のひとこまです。各分科会とも定員をオーバーする盛況ぶりで、参加された会員の皆様は、講演、研究発表に熱心に耳を傾けていました。

「高福祉実現には高負担の覚悟を」

時事通信社から寄稿依頼があり、同社が発刊する「厚生福祉」の11月9日号に、本会近藤会長の進言が掲載されましたので紹介いたします。



進言

高福祉実現には 高負担の覚悟を

近 藤 和 義

1カ月程で降雪の冬となる新潟も今年の夏は猛暑であり、包括支援センターには高齢者からのSOS及び訃報が相次いだ。いずれも単身、老夫婦世帯からである。

来年度から厚生労働省では、高齢者の在宅介護を支える新たな仕組みとして“24時間地域巡回型訪問サービス”及び“お泊りデイサービス”を推進する予定と聞いている。

この夜勤業務を主とする二つのサービスは、地元長岡市で国に先駆け介護保険制度導入前に先進モデル事業として実施されたが、“24ヘルプ”についてはモデル法人だけが細々と続いているだけであり、“お泊りデイ”に至っては全くニーズが無く、十分な成果を上げられずに今に至っている現状だ。

“24ヘルプ”については重度化に伴う家族介護力の低下、夜間訪問時の家族ストレス等が要因であり、“お泊りデイ”については一日ショートステイとの相違の問題、利用者の固定化による本来のデイサービス機能の縮小、そして通所と入所が混在する為、利用者のサービスに対する理解力不足が生じたことなどからであった。

加えて、世の中の不景気とはいえ人材（財）確保が更に厳しくなっている昨今、実施に当たっては幾つかの高いハードルを越えなくてはならない。まず、①施設サービス同様の保障は必ずコスト高になること②介護保険制度の原点である利用者がサービスを選択できることの保障③高福祉には高負担が伴うことの覚悟——などである。

いずれにせよ、実施に当たっては十分な検証を切に望みたい。

（社会福祉法人長岡三古老人福祉会法人総務局長・特別養護老人ホーム楳山けやき苑苑長、社団法人新潟県老人福祉施設協議会会长）

《時事通信「厚生福祉11月9日号」より》

新潟県遊技業協同組合「福祉車両」の贈呈施設について

本年も新潟県遊技業協同組合様より、本会から推薦する県内の5施設・事業所に対し福祉車輌の贈呈が決定されました。

12月中旬に新潟県遊技業会館において、補助金目録贈呈式を実施する予定です。

平成22年度新潟県遊技業協同組合「第9回送迎用福祉車両」贈呈施設・事業所一覧

No.	車種	施設・事業所名	法人（代表者）名等
1	三菱ミニキャブバン ハーティーランリフト	デイサービスセンター はもちの里	社会福祉法人 小佐渡福祉会 理事長 高椿勲夫
		特別養護老人ホーム さくら聖母の園	社会福祉法人 フランシスコ第三会マリア園 理事長 佐藤夏樹
2	ダイハツタントスローパー ^{リアシートレス5ドア}	特別養護老人ホーム あおりの里	社会福祉法人 小千谷北魚沼福祉会 理事長 佐藤知己
3	スズキエブリイ車椅子 移動車リアシート無	特別養護老人ホーム 菅名の里	社会福祉法人 中東福祉会 理事長 向隆
4	スズキアルトセダンF	特別養護老人ホーム 岡南の郷	社会福祉法人 信濃川令終会 理事長 小野澤豊

全5台

施設長 リレーコラム

「地域と共に」

羽衣園 園長 田巻 清美



羽衣園は、平成9年に旧朝日村（現在は合併し村上市）に開設された特養50床、短期入所20床の施設で、平成18年にユニット型20床を増床した一部ユニット型特養です。

同じ施設の中で、従来型とユニット型のサービスにあまり格差が生じないように心がけ、従来型でも「個別ケア」を推進し、2つのグループに分けたケアを行っています。

従来型に配置されている介護職員にもユニットリーダー研修を受講してもらい、ユニットケアの視点やケアの実際をグループケアに活かし、リビング的な居場所づくりと介護職は勿論のこと、他職種を含めたケアに対する職員の意識改革等に取り組んでいるところです。ご自宅や買物等への個別外出支援、ご利用者の表情やスタッフとの信頼関係等に少しずつグループケアのプラス面が現れて来ているようです。

また、家庭的な雰囲気を大切にし、ご利用者に住み慣れた地域の中で暮らしているという実感をもっていただけるよう昔ながらの慣習行事や外出に積極的に取り入れています。

この地域には、「お神楽」をはじめお祝い事等に必ず登場する代表的な郷土料理「大海（だいかい）」があります。ご利用者が最も親しんで来られた味であり、こだわりがあります。10

月25日には、ご家族もお招きして収穫祭を行い、職員が大海作りに挑戦しました。味の方はご利用者にかわるがわる味見をしていただきました。写真はその時の一枚です。

現在、当施設は、村上市から高齢者生活福祉センターの指定管理と朝日地区の特定高齢者（二次予防事業対象者）介護予防事業を受託しています。高齢化が加速する中で、地域ニーズの把握に努め、特養待機者の問題も含めてニーズ充足のための社会資源をいかに提案・開拓していくかが課題です。当法人の基本理念である「一人ひとりの安心と笑顔のために」、関係機関及びボランティアをはじめ地域の方々と連携し、共に地域を支えるネットワークの構築に向けて取り組んでいきたいと考えています。



編 集 後 記

気がつけば「不惑」の年（40歳）をこえ「知命」（50歳）にとどいた。しかしながら未だ「志学」はおいてけぼり、試行錯誤の人生というよりは暗中模索の人生進行形である。気を引き締めながらこれまでを振り返ってみると、日々の仕事の中で自分の役割もおのずと見えてくるような気がする。

さて、この人材派遣事業も2年目で胸突き八丁をむかえている。これまで応募者数・累計650名。採用職員数・累計240名。いま派遣先施設で奮闘中の180名の顔がうかんでくる。人材派遣センター職員6名。こちらも奮闘中！！！

老施協 人材派遣センター長 川俣利克